

第 53 回東京財団フォーラム 「被災地の聞き書き 101—一個の物語から社会を考える—」

- 日時・場所：2012 年 11 月 7 日（水）18：30-20：30、日本財団ビル 2 階
- 登壇者（敬称略）
 - 「聞き書き 101」話し手：芳賀 廣喜（岩手県大槌町吉里吉里地区）、平野 栄紀（同左）
 - 「聞き書き 101」聞き手：吉原 祥子（東京財団）、佐々木 明日香（玉川大学 4 年）、
橋本 拓真（慶応義塾大学 4 年）
 - モデレーター：塩野 米松（作家）
- 全体司会：富永 朋義（東京財団）

【開辞】（富永）

「被災地の聞き書き 101」は昨年 7 月、民間シンクタンク・東京財団と NPO 法人・共存の森ネットワークとの共催で始まった取組みです。聞き書きとは、聞き手が繰り出す質問に話し手が答え、そのやりとりの録音を一字一句書き起こし、話し手の言葉だけで文章にまとめる手法です。ご縁でお会いした 4 つの地域、岩手県大槌町吉里吉里地区・陸前高田市田束地区、宮城県南三陸町志津川地区・石巻市の 101 名の方々に、47 名の聞き手がお話をうかがいました。聞き手の約半分は大学生ですが、そのほか東京財団、共存の森スタッフ、国連大学高等研究所や地方自治体の職員、企業に勤めている方など様々な人が参加しました。

被災地でお話を聞く取組みはいくつかありますが、この 101 の特徴は、主に震災前の普段の暮らしをお聞きする点にあります。勿論、震災当日その後の様子にもふれていますが、それ以上に、震災前の日常生活、お生まれになってからの暮らしについてお聞きしたいと思いました。それは、101 の趣旨、この取組みを始める時に考えた 2 つの点に由来します。

ひとつは、被災された方々が日常を取り戻していくなかで、その拠り所となるのは、震災前の普段の暮らし、ご自身の体験ではないか。であれば、その暮らしの物語を記録に残すことに意味があるのではないかということ。もうひとつは、その物語のなかに、私たちの側が震災復興のあり方や関わり方、それとつながる日本社会のあり方、関わり方を考える際の大事なヒントが潜んでいるのではないかということです。その思いのもと、話し手と聞き手が一緒につくりあげた 101 個の作品が、今日皆さんにお配りしている書籍に収められています。

本日は、その 101 個のうち 52 個の作品がつくられた大槌町吉里吉里地区の話し手 2 名、そして吉里吉里地区、陸前高田市、南三陸町を訪れた 3 名の聞き手にお話をうかがいます。

現在、復興予算の使い方が問題視されています。これは流用だ、いや基本方針から外れてはいない、回りまわって被災地のためになる等、いろいろ意見はありますが、大事なことは、被災された方々の暮らしに目を向けているかどうか、思いを馳せているかどうかだと思います。現場に目を向ける大切さは、復興のみならず政策全般にもいえることでしょうし、また、政治・行政に携わる人々だけではなく私たち一人ひとりにも当てはまることだと思います。今日は約 160 名の方々にお越しいただいています。陸前高田の話し手、各地を訪れた聞き手の方々も来られています。そのほか、NPO、大学、企業、自営業、行政機関、メディア等さまざまご参加いただいておりますが、おそらく、皆さんの共通の思いは、これから何ができるのか考えたい、ということでは

ないでしょうか。被災地とか被災者といった抽象的な括りではなく、話し手・聞き手ともに個人の肉声を聞き、復興のあり方や社会のあり方、その関わり方を改めて見つめ直す機会になればと思います。なお、お配りした書籍はアマゾンで購入できます。税込 1,575 円。是非、周りの方々にもご紹介ください。

【第 1 部】話し手に聞く（芳賀廣喜・平野栄紀×塩野米松）



塩野：お二人には、さっき初めてお会いしました。ですからまだ何も聞いていなくて、皆さんとほとんど同じ立場です。まずお二方に、生年月日と職業、自己紹介をお願いいたします。

芳賀：それでは、私の方から。昭和 22 年 11 月 28 日生まれです。団塊の世代の 1 回生です。西暦で 1947 年ですね。まもなく高齢者になります。よろしくお願いします。

塩野：ご職業もお願いします。

芳賀：震災の時までは、地方紙の新聞店の代理店をしていました。残念ながら、震災によって新聞社が閉まりましたので、今、休業状態ということでございます。

塩野：新聞は、何新聞ですか？

芳賀：岩手県釜石市の岩手東海新聞という新聞でした。

塩野：どれぐらいの部数が出てたんですか？

芳賀：7,000 部くらいじゃないかなと思います。

塩野：ひと月の購読料はいくらですか？

芳賀：1,500 円でした。

塩野：その代理店をやっていると、どれぐらいの収入があるもんですか？

芳賀：そうですね、何とか税金は払える状態でした。

塩野：その仕事が今はなくなっているということですか？

芳賀：そうですね。なくなりましたけども、私は仮設住宅の自治会長をしています。それから、今年の 2 月に、大槌町、大船渡市、北上市にある仮設運営のお手伝いをする組織ができました。これは町主体で。そちらの方もお手伝いしてくれないかということで、2 月からサラリーマンしています。

塩野：そうすると、今ご収入というのは？曖昧でいいですよ、お答えづらければ。税金は払えない程度ですか。

芳賀：そうですね。まあ、10と20の間です。

塩野：そうですか。今、ご家族は？

芳賀：女房と二人です。

塩野：では、もうお一方、お願いいたします。

平野：平野栄紀と申します。昭和29年、4月14日生まれです。58になりました。仕事は、損害保険の代理店業をしております。28歳からその仕事をしてましたんで、今30年目というところですよ。

塩野：今、ご家族は？

平野：妻と親父と。おふくろが震災で亡くなりましたんで。あと息子二人と娘一人と。孫が三人ほどおりましてですね。来年また一人増える予定でございます。

塩野：今、お住まいになっているのはどちらですか？

平野：弟の家に、親父と二人で居候しているんです。妻とは1年以上別居しております。というのは、仮設への私の申し込み方も悪かったんです。戸別ではなく家族全員で申し込んでしまったために、役場の方は人数割りで仮設二棟となったんです。でも実際は、部屋一つぐらいの広さで息子夫婦の所に入れなかったもんで、私と親父だけが弟の家にお世話になっています。

塩野：芳賀さんのお住まいは？

芳賀：私は仮設におります。

塩野：どれぐらいの広さなんですか？ご夫婦で。

芳賀：私は女房と二人ですけども、6畳間と4畳半。ただ計りますと畳一枚より狭いですから、5畳と4畳ぐらいじゃないかなと思います。

塩野：設備としてはどんなものが、今のお住まいの仮設にはあるんですか？

芳賀：洗濯機、テレビ、掃除機、そういうものは最初から備え付けですし、お風呂もついています。私のところが幸いだったのは、建設会社じゃなくて住宅会社の仮設だったので、後付けで暖房設備や断熱材を付けるということにはなかったです。正面が漆喰ですので、よその仮設よりは結露が少ないとか、密閉度が高かったんで。いいところに当たったなと思っています。

塩野：いい方の仮設だったということですか？

芳賀：町内では一番いいですね。

塩野：一番悪いところ、運の悪いというか、設備が整っていない仮設はどんな感じなんですか？夫婦二人で住む場合。

芳賀：まあ、部屋の間取りそのものに大して差はないんですけど、去年の5月とか7月に仮設が完成した後、9月頃に寒さが来て、外壁を剥して断熱材を入れて。だから余計な手間のかかっている所。それから、夏の暑い時には、いくら戸を閉めても小さい虫が入ってくるという、そういうことは聞いていました。

塩野：芳賀さんが被災前に住んでおられたのは大槌町の末広という所ですね。みなさん、テレビやニュースなんかでこの名前をよく聞いたと思いますが、ざっとこの大槌町というのはどういう



所だったのかをお話いただけますか。

芳賀：大槌町そのものは震災前、1万6千名弱の小さな町でした。残念ながら過疎化が進んでいた状態です。隣接する釜石もそうですけども、人口が大幅に減っていました。昔は釜石に新日本製鉄がありましたので人口が10万くらいあったのが、今は4万人を切りそうです。大槌もそのベッドタウンですから、自ずと人口減が進んでいますし、それから漁業者も高齢化。仕事がないゆえに地元から離れるというのが進んでいたなかでの震災でしたから、残念ながら人口減に拍車がかかっている状態です。

塩野：現在はどれくらいの人数なんですか？

芳賀：亡くなった方と住所変更した方で、4千名くらいが減っていると思うんです。その他に住所変更しないで仕事求めて出ている方もいますから、今現在、1万人すれすれじゃないかなという話は伺っています。

塩野：平野さんは、損害保険をやっているらしいので、町の中のこと、様々なご職業など詳しいと思いますが、この大槌町のメインの産業はなんだったんですか？

平野：漁業と農業、林業というかたちで。水産加工場は釜石とか宮古にあるので、地元の水産加工場が少ないせいか、漁業としてはワカメの養殖が盛んでした。

塩野：この1万6千人いた中から、その漁業関係者、たくさんの職業重なっていると思うんですが、漁業関係に少しでもかかわる人たちの割合はどのくらいだったんですか？

平野：地元の吉里吉里地区でワカメの養殖に携わっているのは、6、7人。今年の春先にその人数でワカメの養殖をやってですね、値段もよかったせいか、水揚げが1億くらい。結局、後継ぎといいますが、親父さんが漁業をやっていて息子さんもという感じ。そういう所しか残らなかったです。ほかの方々は諦めました。



塩野：そうすると、今度の震災前にワカメをやっていた人たちはどのくらいいたんですか？

平野：吉里吉里だけでも、4、50軒くらいだったと思います。

塩野：ということは、簡単に売り上げを人数分だけかけていくと、それだけの売上があったということですか？40億とか。

平野：いや、今年はたまたま震災でワカメを保管している冷蔵庫が流されてストックがなかったもので、すごい高かったんですよ。

塩野：ワカメ以外の漁業というと、あと何ですか？

平野：ホタテ、ホヤ、カキ。これから秋は鮭の定置網漁業、そんな感じですね。

塩野：そうすると、基本的には養殖を中心にした漁業があって、それに鮭だとか季節ごとのものが加わっていくということですか？

平野：はい。

塩野：この漁業を継ぐ方たちは基本的におじいさん、お父さん、それから子どもたちというよう

に代々継いできたのですか？

平野：そうです。

塩野：芳賀さんにお聞きしますけど、この大槌、吉里吉里あたりで、僕たちが知っているような事件ってございましたか？津波以外で。

芳賀：報道されているのでみなさんご存じなのは、津波で町長さん以下、職員の幹部級が半数亡くなったというのが大きな事件ですね。

塩野：津波以前でしたら、僕たちが「ここが大槌町だったんだ」みたいなことってありますか？

芳賀：みなさんが知っていたことはなかったんじゃないですか。

塩野：そうすると、代理店を務めていた新聞には、どんなことが書かれていたんですか？

芳賀：釜石から宮古くらいまでの海岸線のローカルニュースですね。

塩野：例えば、紅葉がはじまったとか、カキがとれだしたとか？

芳賀：そうですね。カキなんかはもちろん出ますし、中央紙とか盛岡を中心とする新聞には出ない漁価の単価、そういうものは出ていました。あと、おもしろいのは、家庭内暴力のクマが子連れで木に登って逃げてんのにね、オスのクマが下で見張って降ろしてよこさないとか、そういう和やかなニュースもたまには出るような。

塩野：今のお話を聞いていると、なんとなく日本昔話みたいな所だったんでしょうか？のどかな。

芳賀：そうですね。特に我々の吉里吉里というのは、作家の井上ひさし先生が吉里吉里人のモデルにしたぐらい、ローカルだったと思います。

塩野：大槌の中で、吉里吉里だけの人口というのはどれくらいだったんですか？

芳賀：震災前は約 2,700 名くらいだったと思います。

塩野：現在は？

芳賀：正確な数字は把握していないんですけど、大槌町全体で被災者が約 9%だったんですが、吉里吉里地区は幸いにも 3%ですんでいるというくらい。90 名弱ですかね。

塩野：お住まいになっている仮設では、震災前に仲良くしていた人とか、顔を覚えていた人たちは「やあやあ」という感じで、まだたくさんいますか？

芳賀：仮設は大槌に 48 か所、2,100 名の方が住んでいるんです。私のところは 25 戸の小さい仮設でございまして、なおかつ幸いだったのが、仮設の住民の 90 パーセントが吉里吉里の方です。なので、巷でいわれているような、ランダムで入ったがためにコミュニケーションとりづらいついていうのはなくて、うちに関しては比較的スムーズにいつているような、穏やかな和やかな仮設ですね。

塩野：芳賀さんは、数字がすぐ口から、3%とかいっぱい出てきますけど、それは今お手伝いをしている立場上、すぐに出てくるんですか？

芳賀：ええ、確かに避難所の頃から、二人ともお手伝いしてたんですけども。やはりその時の数字がまだ残っているのはありますね。

塩野：平野さんも同じですか？聞かれれば、すぐにパーセントだとか数字でお答えできる？

平野：いや、私は頭良くないもんですから。パーセンテージはわかりませんが、何人くらいという感じの数字はあります。

塩野：今、11月に入りましたね。それで、もうすぐ七五三だとかの時期ですが、この11月頃には、被災前の大槌というのはどういう行事をなさっている所だったんですか？

平野：吉里吉里でいえばですね、漁業の方は、アワビ漁が11月と12月の2か月あります。私の生業は損害保険代理店業なんですけど、親から引き継いだ漁業権というのがありますんで、自分ひとりで出漁するんです。それが年末のボーナスになるんですね。だから、この2か月で、私でさえだいたい100万くらい。

塩野：アワビで？

平野：はい。本当に採る人は、300万、500万という感じで。年末のボーナスという形で。

塩野：2か月間で？

平野：はい。

塩野：は一、聞きづらいですね。その2ヶ月間で。漁業権を持っている方は何人くらい？

平野：吉里吉里では、震災後ですけど船の数みると5、60隻くらいですね。

塩野：被災前と同じなんですか？船の数は。

平野：実はですね、大槌漁協というのが、倒産じゃなくて解散したんです。結局、津波で定置網も全部だめになりましたし、秋の鮭で漁協を運営していたようなもんだったんです。それで、去年定置ができなくなったために、本来であれば倒産という形をとるだろうけれども、解散ということで。倒産の場合は、役員の方々が組合の財産を全部売って、足りない場合は理事さんとかも自分の財産を差し出してっていう形になるらしいんです。それを解散という形にして、そういう負担をしないようにと。ただ、組合員、漁業者たちの出資金というのがありますね。それなんかは全然戻ってこなかったんですけども。今年新たな組合を立ち上げて、新しい出資金10万ということで、また新しい組合になったということですね。

塩野：みなさんよくわからないところもあると思いますが、漁業権というのはどうやって受け渡しされるんですか？

平野：家族しか引き継ぎはできないんです。おじいさんからうちの親父に、親父から私っていう形で。本来であれば、保険の仕事をしてますから、海の仕事全然してないんで、引き継ぎはできないんです。でも、春のワカメ養殖の手伝いをしたりとか、そういうのをやって年間90日海の仕事に携わっているということで、組合員としての資格が得られるわけなんです。私は自営業ですから、そういう時間はありますんで。資格審査というのが組合にありまして、実際にこの人はどのくらい漁業に携わっているのかということで。資格をパスしましたんで、親父の漁業権を譲渡されたということです。

塩野：それは、世間でいう漁業協働組合の正組合員にあたるものをいいますか？

平野：そうです。

塩野：正組合員には90日間以上働かなくちゃいけないということだとか、漁協を守るための義務の部分がいくつかありますよね。例えば90日以下だと、準組合員になるということですか？

平野：そうです。

塩野：正組合員と準組合員の違いはなんですか？

平野：11月、12月のアワビ漁、5月から8月のはじめまでウニ漁があるんですね。それを正組

合員は一回目からずっと行けるんですけども、準組合員というのは 5 回目以降じゃないと行けないんです。

塩野：先に採られた後ということですね。

平野：そういうことです。それが正組合員と準組合員の差なんです。出資金は一緒ですよ。

塩野：出資金は一緒なの？

平野：出資金は 10 万円で一緒なんですが、正組合員と準組合員の差っていうのが、そういうところなんですよ。

塩野：採ったアワビやウニを売ってくれるのは漁協が仲介するわけですよね？

平野：はい。

塩野：準組合員は売ることができないということもないんですね？

平野：そういうこともないです。

塩野：じゃあ、採ったものは公平に。ただ採るのに制限があるとうことですね。

平野：そうです。

塩野：その漁協が一回なくなると、今採ったアワビだとかウニだとか、ワカメだとか、そういうものの扱いはどうなってるんですか？

平野：新組合が立ちあがりましたんで、同じように新組合で取り扱っております。

塩野：では、漁業権の引き継ぎも同じように引き継いでいると。そうすると、形式的には漁協が成り立たなくなったから辞めたけれども、実際には同じものが発生したと。

平野：そうです。役員の顔ぶれを変えて、新しい組合という感じになりましたね。

塩野：それは、津波や地震で起きた災害を負担することをやめて、解散するかたちをとった方がよかったからということですか？

平野：そうだと思います。実際、経営はすごく悪かったんです、津波前も。

塩野：あ、そうですか。

平野：そうです。だから、いつ潰れてもおかしくないって我々も思っていたんで。体よく、これ幸いという形で。我々漁民にしてみれば、この機会に解散しちゃおうということで解散したとしか思っていない。

塩野：被災前には、毎年、アワビだけで 200 万円とか、そういうボーナスが入るようなことだったんですか？

平野：そうです。ただ、今年もアワビに限っていえば、県漁連で事前入札という形でやるんですね。岩手県を 3 つ 4 つくらいの地区に割って、それぞれの地区で入札を県漁連でやるんです。我々大槌町のが一番単価が低いんですね。一番単価がいいのが、宮古の重茂という地区です。

塩野：そこはブランド品なんですか？

平野：そうなんです。あと、釜石の隣の三陸町の吉浜という地区があるんです。そこは吉浜って書いて「きっぴん」と読むんですけども、その「きっぴんアワビ」というのが、中国の漢方というブランドってことで、すごく値段がいいんです。

塩野：そうすると、被災前は、吉里吉里あたりでいえば、のんびりした豊かな場所だった。

平野：ええ、一年ゆっくり流れるんですね。例えば、春、養殖ワカメの収穫。それからアワビ

とかウニを採る人を小漁師というんです。私みたいにアルバイト的にやっている人。本業の人はワカメが終わっても一年ワカメの仕事があるんですね。収穫した後に、それを丘に揚げて掃除をしたりとか。あと、夏くらいになると、メカブってご存知ですか。ワカメの種なんですね。夏にメカブを水槽みたいなのに漬けて。棕櫚（シュロ）縄ってわかりますよね。棕櫚で作った細いロープがあるんですが、それにそのワカメの胞子を付着させて、それを今度、養殖の太いロープに巻きつけてっていう、年がら年中作業があるんです。

塩野：ワカメ養殖が吉里吉里に入ったのは、いつ頃なんですか？

平野：養殖を始めたのが、私が小学校から中学校くらいですかね。今は塩蔵ですけども、当時は乾燥させて出荷していたんですね、組合の方に。

塩野：そうすると、ちょうど日本の高度経済成長期に重なる頃ですか？

平野：はい、そうだと思います。

塩野：平野さんと同じ昭和 29 年生まれの方で、中学を卒業して高校に行かれた方はどれくらいいらっしゃいましたか？

平野：同級生 96 人いましたけど、60 人以上は高校に進みました。ちょうど戦後の昭和 29 年、30 年、戦後のベビーブームのちょうど一番端っこっていいですか。クラスも多かったんですね。

塩野：芳賀さんの時はどれくらいですか？

芳賀：同級生が 100 人いまして、高校に進んだのは 70 名くらいじゃないかなと思います。

塩野：すごく進学率がいいと思うんです。僕が昭和 22 年生まれで同じ年で、学年が一つ上なんです。僕は秋田県の角館というところで生まれ育ったんですが、1 クラス 52 人、1 学年に 8 クラスあったんです。この 52 人のうち、26 人が集団就職で金の卵と呼ばれて出て行ったんです。進学率からいえば 50% だった。だから、僕らの田舎に比べると、現金収入やなんかが多かったせいか、吉里吉里地区は角館よりもずっと豊かだった。

芳賀：そうですね。進学率がいいと思います。確かに集団就職もありましたけど、塩野先生のおっしゃるほど、半数ということはなかったですね。

塩野：僕ら、自分の田舎は豊かな所だと半分は思っているんです。風景もいいし、暮らしも豊かだしのんびりしている。それでも、農業中心の世帯でいいますと、次男三男はなかなか進学することは難しかったし、社会に出た 26 人の方は、大工さんになったり、東京だとか秋葉原にお勤めに来たり、工場やなんかで働く人たち。僕たちの田舎から出てきた、東北の夜行列車で出てきた人たちが支えるような背景だったんです。ですから、中学 3 年の時の修学旅行で東京へ出てくると、上野の近辺に泊まる。自分たちが一人で出てきた時に歩けるようにと、ここが国会議事堂だよとかっていうふうに教わったのは、社会人になるための疑似体験を修学旅行で済ませておこうというくらいのものでしたんですね。高校に進まれて卒業すると、地元に戻ってくるんですか、吉里吉里あたりは。

芳賀：実際には進学校に進んでも、親父が漁業者ということで漁業をそのまました方もおります。中央を目指す方もたくさんいたと思うんですが、比較的、私たちは塩野先生と同じ団塊の一回生で、ベビーブームのピークの時ですから、どちらかというと長男が多かったせいもあって、地元に戻っている方が多いです。

塩野：僕たちと同じ世代で、高校に行くなり大学行くなりして、地元にもどってくるとどんな職業に？家の後を継ぐんですか？

芳賀：長男はそういう方が多いですけど、ただ我々が社会人になった頃と現在とは、まったく違います。

塩野：当時は帰ってきても親の職業だとか商店だとか継いだと思いますが、それはほとんどダメになっていってるんじゃないですか？

芳賀：そうですね。平野君がいう通り、その時に養殖漁業が始まったんですが、その前には北洋のサケマスとか定置網も今以上に良かったです。それから遠洋漁業。外に出て採ってくる漁業がたくさんでした。でも外圧とかいろんな関係があって、結局採る漁業から育てる漁業に変わったのが、今から約 40 年、45 年くらい前ですかね。その頃、ホタテとかワカメが始まったと私も記憶していますから。

塩野：北洋だとか南洋だとか、そうした遠方に出て行く人たちは、半年以上帰ってきませんよね。

芳賀：腕のいい船頭ですと、年に 2 回入りますけども、長い方で 1 年。だいたい平均 9 カ月から 10 カ月は船の上という生活でしたね。

塩野：北洋だとか南洋だとか行かれると、一回の長い旅から帰ると、家が建つくらいのお金をもらってきたと聞きましたけど、そうなんですか。

芳賀：40 年前は、日本がどこも豊かさに向かっていた頃の時です。その頃ですと、例えば一切何も資格がない、中学校終わったばかりの人でも、4 年稼いだら立派な家ができましたね。

塩野：そういう時代の漁業があったんですね。その後、遠洋がだめになる、北洋がだめになる。船の持ち主は吉里吉里の方だったんですか？大きい船は。

芳賀：ええ、当時はそうでした。

塩野：ということは、漁業に伴う造船業だとか、様々なものも吉里吉里に揃っていた。

芳賀：そうです。当時は全部地元の方が運営していました。

塩野：豊かな所だったと思うんですね。例えば北洋だとか、そうしたものを辞める時にかなりの保証金が出たと思いますけど、漁業関係者はだいぶ保証金をもらいましたか？

芳賀：ははは。正確な数字は聞いていませんけども、例えば北洋なんかを辞める頃っていうのは、外国産の魚も入っていましたし漁価が下がっていました。それからさっきの組合と同様に、北洋に出るための権利金というのがあるわけですよ。当時、3、40 年前でも億の金。それを担保に金を借りられるくらいの権利金だったんですが、あとあと辞めた方は、その権利金はほとんど一切価値のないものになっていましたね。

塩野：基本的には、震災前の暮らし方、もう一つ前の日本中の経済が発展して景気のよかった時代、昭和 39 年に東京オリンピックがありますが、あのあたりのてっぺんの時の漁業者というのは、多分 1 日の働きで普通のサラリーマンの 1 カ月分の給料くらいだったんじゃないですか。

芳賀：確かにその通りです。私たちが高校終わる頃、昭和 41 年ですけども、親がお前役場に入ったらっていうと、「あんなとこ誰が行くんだ、馬鹿が行くんだ」と。言葉乱暴ですけども、そんな所に行くよりも浜に出ろという、そういう時代ですよ。

塩野：これは吉里吉里に限らず、ほとんどの漁村でそうだったと思うんですね。ただ、その後に

加工業を持ってくるとか、付加価値を付けるための設備を持ってくることで生き延びるとか。保証金をもらって息子たちを大学に行かして、その子たちが帰ってこなくなるとか、そういうことはございませんか？

芳賀：その辺は、ご指摘のように難しい問題だと思うんですね。震災前から景気自体が下がっていましたし。大槌町にあった何百人っていう従業員抱えていた工場が再建しようにも立地場所がないと、やむをえなく隣の釜石市に設置しなきゃない。そうしますと、目の前に工場があれば働けるお母さん方も、車でなきゃ行けない。ですから、全体として雇用がどんどん下がっていく。理想だけじゃ生活できませんから、仕事



求めて内陸に行く。悲しいですが、そういう悪循環がちらほら見えますし。そうならないように期待はしてますけど、現実はちょっと厳しいですね。

塩野：内陸っておっしゃるんですね。この方たちの地区から見ると、盛岡とかあそこらへんを内陸と呼ぶんですね。基本的には都市という意味も重なっているんです。ですから、海沿いの町は都市にはなりづらかった。釜石だとか宮古だとかは別ですが、基本的にはこういう事態が起きると、内陸の高校に行かせることができるかどうかとか、働き場所を内陸に求められるかどうかという話になるんです。岩手県の総人口としても 100 万くらいじゃないですか？

芳賀・平野：そのへんじゃないですか。

塩野：そうですね。秋田県も同じように、仙台市一個より小さいんです、総人口が。まもなく 100 万割ると思うんですが、そうした所の大きな都市、秋田市であっても、せいぜい 30 万から 35 万くらいだと思うんですね。盛岡にしても似たようなもんですよね。これがだいたい岩手県だとか東北の県の規模なんですね。そういう所が、今度被災にあって、これから建て直そうといっている。この人たちの元の生活、例えば 65 歳、僕も 65 歳ですが、この間に大きな変化がいくつもいくつもあって、変わらなかったのは風景だったり海だけだったりするんです。あとは祭りや行事だけはそのまま残されてきたと思うんですが、暮らし方は様々に変わってきた。様々に変わってきたことを自分たちで体験することで、あの故郷ができてきた。ですから、どんな復興の仕方をするかといっても、どの時点のどこを目指すのか。それから漁業者の問題、農業者の問題、林業者の問題、様々な方たちが住んで大槌町という 1 万 6 千人の町が成り立っていた。僕たちが復興のお手伝いを少しでもしたいと言った時に、誰かが決めたものを手伝うのか、それともこの方一人ひとりのどっかの歴史を知った上で手伝うのか、そういうことを踏まえて考えていく問題なんですね。そこに、急いでできること、長い間かかって元にもどしていくもの、できるものならもっと新しく工夫を与えたい作業が加わる。様々な復興の形を考えていく上で、今日たまたまお二人に来ていただいた。ほんのわずかな時間ですけども、岩手県の小さな吉里吉里という集落の漁業の形がどんなもんだったのか、少しは見てもらえたと思うんですね。今、祭りだとか行事は、ほとんど復活してるんですか？

芳賀：はい、今年は。

平野：吉里吉里には郷土芸能というのが3団体あります。そんで、私は大神楽というものの保存会長しているんです。去年お祭りができなかった分、今年はすごくいろんな想いがありまして、本当に涙が出る思いでお祭りをできたんです。いろんな団体の方々からご援助いただきましてね、お祭り道具をそろえることができた。唯一3団体の中で、私の団体だけが何もなくなっちゃったんです。江戸時代から受け継がれてきた獅子頭とか、そういうものもみんな流されてしましまして。私の自宅の隣、築7、80年くらいの古民家に保存会館というのをつくりまして、そこに道具を置いてあったがために、津波で全部流れちゃって。日本財団さんがいち早く郷土芸能にご理解いただいて、三陸で一番多くわが町にご援助いただき、祭りの復活につながりました。

塩野：今、みなさんが大神楽っていわれて頭に浮かべたものと、たぶん言っている大神楽が違うんですが、もうちょっと説明していただけますか。

平野：こっちの方で大神楽っていうのは、みなさんが考える獅子舞みたいなものですね。前後に人が入りまして、二人で演じるものなんです。この吉里吉里地区というのは、吉里吉里善兵衛という豪商がおりまして、江戸時代に。この豪商が江戸と交易して、俵物といいますか、ワカメ、シャケ、アワビとかを交易をしておりました。その船乗りが江戸に来て、歌舞伎を見て、それで獅子踊りとか虎舞（とらまい）とかを創作して始まったものなんですね。だから、歴史はすごくあるんです。

塩野：その大神楽を復活させるためには、まず囃し手というか、笛？

平野：笛、太鼓、あと、手振り鉦（てぶりがね）という平たいもの。

塩野：鉦ですね。この3つですか。これに何人くらいいますか？

平野：会員は60人。

塩野：獅子舞の獅子は何頭出るんですか？

平野：残っているやつで5頭くらいですね。各々の家に持ち帰っておったのが助かったんです。

塩野：そうすると、震災前には、通常5頭と囃し手で1グループですか？

平野：はい。

塩野：5頭の獅子にオス、メスとか？

平野：オスメスはないんです。オスだけなんだかメスだけなんだか、わかりませんが。

塩野：それは何月何日に始まるものなんですか？

平野：お祭りは、8月16日が宵宮、17日が祭り。

塩野：お盆の最中にやることなんですね。

平野：そうです。

塩野：今回はそれが復活できて、昔で言えば村中を練り歩く。今回で言うと、仮設住宅を？

平野：私、周りました。

塩野：こういう行事の復活を、再興の兆しと、みなさんはおとりになっていらっしゃるんですか？

平野：やっぱり一年見なかったがために、気持ちちが沈んでっていうふうにとれだったし、お祭りできてよかったねって、みんなには言われました。

塩野：この後、吉里吉里の復興の形はどんな方向に向かうんですか？

平野：役場の方から示されている事業が2つあるんですね。震災で浸水したところは、もう家建てられないんで移転という形になります。若干残っている所は、区画整備ということで土盛りをします。そこに戻ってきてくださいという形になるんですが、その事業がまだ始まっていないんですね。来年度から始まる予定なんです、ただ土盛りをするにしても、土をどこから持ってくるのやというところまでは、まだ詰めてない。



だから今、大学の先生とかコンサルタントとか、そういう人たちが机上で書いたものを地元を示しているだけで、地元とすれば地元の意見をもっと入れて欲しいんですけども、そこが入っていない。

塩野：復興のスピートは早いんですか、遅いんですか？

平野：うーん、私は遅いと思います。

芳賀：遅いことは遅いですよ。ただ、先ほどいったように、大槌にしる、よその市町村、沿岸漁村というのは、元々が人口減であえいでいた所ですから、財政的にも交付金とかを当てにしないといけないという現状が続いた中で、やはり自分たちだけで絵はかけないですよ、首長が。これは県知事も市町村長もしかり。巷で言われているような、ひも付きのものは明確にする。早く進めるためには、飲まざるを得ないこともある。痛し痒しの状態が続いています。私たちの大槌町というのは、元々、住宅地の狭い所なんですね。ですから、高台移転とか奥に入っていくと、今度は漁業者が出てこれない。いろんなギャップありますから、絵に描いたようにはスムーズにはいかない。ただ早く進めなければ、特に高齢者は先を悲観してしまう。60代の人でも、残念ながら人生急いだ方は何人かいるんですよ。最短で4年後に家の土台組めるという、家を建てるんじゃなく。80を超えた方にすれば、そう言われますとね。いくら焦らないで、くじけないでって言っても、そんなに精神って丈夫じゃないですから。一つの例なんです、我々の方はセシウムの数値は低いんですが、いろんな自治体の手を上げて住民が発起しないということで、瓦礫を引き受けてくれる所が少ない。がゆえに、残っている。確か8月末で、大槌町で8%くらいしか処理できていない。うちは遅い、釜石は早い、山田が早い、宮古が早い、高田が早いと思って聞いてみたら、どこも似たようなもんなんですね。となりの庭が綺麗に見えると同じで。

塩野：実際には、ほとんど片付いていない状況。

芳賀：私たちの吉里吉里地区で、最大でかさ上げが7.5から8mとっています。これを住めるようにするには5年はかかりますよね。それまでね、やはり待たないといけないという現実もあるし、急げ急げと悪口ばかりも言っていれないし。ただ、いつまでも待ちますよというの、これもまた。私、それを踏まえて、1月に仮設に張った言葉があるんです。神戸のみなさんや中越の方々から教わった言葉で、「あせらず、くじけず、あきらめず」と書いたんです。それを

みんなにも言いながら、自分に言い聞かせて。焦れば遅れが目立ちますし、あきらめることはできません。そういうつらい気持はたくさんあります。それから自治会長している中で懸念されるのが、住民が精神的に体調を崩さないかなと。そういうことを出さないようにするために、コミュニケーションよくとるようにしたり、花見をするとか、盆踊りをするとか、いろんなことやってます。我々は行政ではないですから、行政とはまた違った立場で。考える復興の形は違うかもしれませんが、少なくとも、人生を急がないでほしいなと思いますね。

塩野：書かれている標語がちょっと悲しい気がします。でも、きっとこれが現実だと思うんですね。一部の時間が来ましたので、お二人に拍手をお願いいたします。

【第2部】聞き手に聞く（吉原祥子・佐々木明日香・橋本拓真×塩野米松）

塩野：3人の方々、自己紹介を兼ねて2つのことを言ってください。自分たちが訪ねた地区がどう見えたのか、それから聞き書きということをやってみて、どう感じたのか。この2つを織り交ぜて、自己紹介をお願いします。

吉原：東京財団の吉原と申します。まず、吉里吉里にいつまでどう思ったかということですが、私は実は吉里吉里はもちろん、岩手県に行くのも初めてでした。関東地方で生まれ育っておりまして、漁業の町に行くということ自体、そしてそこの方とお会いする、きちっと話すること自体が初めてでした。震災前の様子も知らなかったもので、頭の中で、吉里吉里という町をどういうふうに分の中でとらえたらいいのかなということはそう簡単ではありませんでした。私の生まれ育った関東地方とは随分違うんだなという想いを強くもって帰ってきました。そして、なんてきれいな豊かな所なんだろうということを思いました。それから、聞き書きをしてみて、これは本当に相手の人生というものを一部かもしれないけど、自分の中に取り込むプロセスだなと思いました。お会いしたのはたった2人でしたけれども、いまだにお2人の口調とか、語って頂いたお話は時折思い出します。あの方々、太田シズさん、倉本修一さん、今頃どうしているかなということは本当に時々思い出します。それくらい、強いインパクトのある経験でした。

塩野：聞き書きははじめてだったんですね？

吉原：そうです。

塩野：そのお二人はどんな方だったか、ちょっとお話いただけますか。

吉原：はい。お一人目の倉本修一さんは、40代半ばくらいでした。漁業の家に生まれて三代目の漁師さんでした。私よりも2つ半くらい年上で、同世代の方でした。もう一人の方は、太田シズさんといって70ちょっと前の方で、私からみると母親の世代に近い方。子育てをして、そのあと水産加工場でもしばらく働いて、そして義理のお義母さんと密な関係を持って、お義母さんを看取って、今は娘さんと仮設にいらっしゃるという方でした。



塩野：後でみなさん読んでいただければわかりますが、そのお義母さんとの暮らし方というのも、「おしん」の時代くらい古く感じる話ではなかったですか？

吉原：お義母さんに、それこそ箸のあげおろしにいたるくらいまで厳しく言われて、随分つらい思いをしたと。実家に帰りたいなと思うこともしばしばあったけれども、近所のおばあさんがよくしてくれて、あんまり愚痴をいうんじゃないよと。愚痴を言うと、お義母さんの耳にもすぐはいっちゃうんだから、ここで愚痴をこぼしてお義母さんには言わないだよ、周囲の人には言わないんだよといわれて助けられたと、そういう話を聞きました。



塩野：書かれている中身も愚痴を抑えに抑えてしゃべってくれている様子がよくわかるんですね。お義母さんは保母さん？

吉原：幼稚園を経営していたそうです。

塩野：経営していたお義母さんの所に、普通の漁業の方ですか、あの方の家は。

吉原：実家は隣町で、お父さんは町会議員など村のいろいろな役に携わっていたようです。

塩野：吉里吉里にお嫁に行って、ご主人とは恋愛だったんですね。

吉原：はい、列車の中で知り合ったと言っていました。

塩野：みんなに反対されてお嫁に行った先が、そこだった。とっても大変だった。その後に、お義母さんが病気になる。自分は今度、水産加工会社の仕事で、はじめてお金を稼いで、みんなと一緒に働きに行った。その時の様子が、あそこにも社員旅行にいった、ここにもいったと、とっても嬉しそうに書いてある。その方の人生が、よく見えるんですね。つらかった時代のお義母さんにいじめられた、というか仕込まれた、教えていただいたことが山ほどあったという言い方をなさった。この言い方がすごい。その後の楽しみに語る社員旅行の話だとか、年に一回、一泊二日か、それくらいでみんなといった旅がずっと思い出として残っているというお話なんですね。そういう方に、東京の吉原さんが自分の生活と照らし合わせながら聞く。もう一人のサケ網やなんかやっている方にしても、まるで違う生活のことを、何を聞こうかもわからない状態で話を聞きに行っている。そうした意味では半分大変。そこから理解するのに、そんなにまるごとわかるというわけにはいかないですね。

吉原：特に倉本さんは漁師の方だったので、延縄（はえなわ）漁業とかワカメの養殖とか、初めて聞く話ばかりでした。ただその分、聞きやすいという面はありました。知らないことがたくさんありましたので、具体的な話を引き出すのは、やりやすかったです。一方で、太田シヂさんの方は、日常の話をたくさん伺いました。伺っている最中には、これで本当に聞き書きの作品になるのかなと不安に思いました。というのは、何かドラマチックな出来事を聞かなきゃいけないんじゃないかと最初は思っていたので、こんな淡々とした、おみそ汁の作り方とか、そういう話で大丈夫なのかなと不安にもなりました。しかし、今読み返してみると、先生がおっしゃったように、行間や言葉の裏につらかったであろう色々な想いがあり、淡々とした日常の話のなかに実はいろんなメッセージや意味合いがあるんだなと思います。

塩野：そうですね。彼女たちは、別に意味合いのある生活をしていなくて、日々毎日を過ごしていくことが大事なことだった。その日々過ごしていく中には、もちろん小さなドラマもたくさんあったかもしれないけど、聞き書きで大事なことは、日常をどう送っているのかを知ること。この会場に 160 人いますけど、それぞれ違うわけですね。それぞれの違いを認め合えるかどうか、その前にどこが違うかを知ることができるかがとっても大事なことだと思うんですね。抽象的に吉里吉里の人はとか、岩手県の人とはというようなものの考え方を一旦チャラにして、吉里吉里に住んでいる太田さんという方はこういう日常生活を送っていました。漁師さんの一人は朝 3 時に起きてこうやって何メートルもある縄に、一個ずつ延縄の餌と針を付けていく。これをずっと繰り返しながらやってきました。こういう人たちの姿が浮かんでこない、僕たちはこの人たちについて論じる資格がないと思うんですね。そうしたことを含めて、吉原さんたちには聞き書きのやり方を簡単に説明して行っていただきました。次、佐々木さんお願いします。

佐々木：玉川大学文学部比較文化学科 4 年の佐々木明日香と申します。神奈川県横浜市出身で、現在も横浜に住んで大学に通っております。私は大学のゼミの先生の呼びかけで参加させていただきました。地域がどうみえたのかということなんですが、私が行かせていただいたのは陸前高田市の田束地区という所で、もちろん初めて行きました。震災前は知らなかった地域でした。地域のコミュニティーがとてもしっかりとできていて、人と人とのつながりがすごく深い地域だなというのが一番印象的でした。聞き書きのお話だったり、その後の懇親会の席でも、とっても仲がよくて、仲間意識がす



ごくあって。自分の地域にはないコミュニティーが震災以前からあって、震災後もしっかりと協力して生活しているんだなということが、とても印象的でした。聞き書きをどう感じたのかということについては、参加させてもらう前は、聞き書きというものを全く知らなかったし、どういうものなのかもわからずに行きました。初めてやって、本当にとっても緊張しましたし、うまくできなかったんですけど。でも出会いのきっかけの場というか、正直、聞き書きの 2 時間というよりも、その後にお話したり、一緒にご飯食べたり、来てくれてありがとうって言うてくれるような関係性を築けたことが本当にうれしくて。現在もお手紙のやり取りだったり、ゼミ合宿として改めて陸前高田に行きました。そういう後のつながりのきっかけになったなと思っています。

塩野：今あなたが住んでいる所には、コミュニティーの要素ってあるんですか？

佐々木：地域のつながりというよりも、小学校だったり中学校だったりの親同士のコミュニティー、つながりのようなものです。

塩野：それは PTA とか、そのようなもの？

佐々木：はい。友達のお母さんとかそういうつながりだと思います。

塩野：本来地区が持っていたようなコミュニティーというのは、すでになくなっている？

佐々木：そういうきっかけがないので。地域で集まる行事もないですし、つながりが薄いなど

思います。

塩野：もし、あなたが今住んでいる神奈川県に、あの密度の濃いコミュニティを持ちこんだら、あなたはどうしますか。

佐々木：ちょっと困ると思います、慣れていないので。自分が何時に帰ってきて、どこに行っているのも、隣の人に知られたりとか、そういうのはないですから。田舎の方で普通にやっている隣どうしの付き合いとかっていうのに慣れていないと、ちょっと。

塩野：それは気持ちとしては、煩わしいという意味ですか？

佐々木：はい、そういうだと思います。

塩野：その煩わしいことをしなくても済む生活が、あなたの都会にはあるということですか？

佐々木：そうですね。

塩野：たぶん、田舎の人たちというのは、隣の人たちが何時に帰ってきて何を食べているのかを知らなければきっとスムーズにいかないような形で住まれていると思うんですね。そうした、自分の町にはなくてよかったこと、よその町にはあってうらやましいと思ったこと、これってすごく大きい差だと思うんですね。陸前高田の方も、2012年の今も、11月7日という今日住んでいらっしゃるって、ずいぶん昔風の暮らしをしているかもしれないけれども、現代人なんだよね。それから、今ここでこういう話をしながら、何かできることはないだろうかと模索している僕たちも現代人。同じように、煩わしいコミュニティは自分では嫌だけど、あの町ではいいものだなあと。例えば、あの町に自分が行った時に、あのコミュニティの中に溶け込めるだろうか。3日間だったら大丈夫かもしれない、それから聞き書きに来たお客さんだから大丈夫かもしれない。でもそこにはきっと何かがあるんだよね。町の復興だとか街づくりだとか様々なことを言われて、たくさんの企画がある、お金もつぎ込まれている。だけれども、僕自身は町や村というものは人が興して興るものではないだろうと思っているんですね。最初の図面はできるかもしれない。でも、家の中に置いた筆筒の位置を何度も置き換えてみるように、次々に暮らしやすい住みやすい様々なことをして、町というのはできていくものだと思っているんです。そのできていく方向というのは、試行錯誤が積み重なって、なんでもない日常を積み重ねる中でできる。もしくは隣の家と行き来をする、隣の家が火事で壊れた、雨が漏った。自分の家はそうならないようにしようとかって様々なことをやりながら、町や村、家の形というのはできて行くんだと思うんです。そうした背景がなかなかわからない。一ついえば、コミュニティの問題。確かに煩わしいくらい、ひどく付き合うんです。でもそれが、一つのやり方。それは日本中どこにいても、小さな田舎にいれば、隣のお母さんのことをお姉さんと呼ぶ。兄弟のように付き合う。だから、隣の家の子どもの何か悪いことをしても、自分の家の子どものように叱る。これはかつての日本の当たり前だった。でもそれをやめることで、都会の生活のパターンは築かれている。その都会の人たちが、今度のことをきっかけにして、もう一度、陸前高田とかあのような町の様子を見る。違いは何なのかをその中で考えて、この人たちは同時代の同じ国に暮らしている人たちなんだということを認識していけるかどうかということがとっても大事だと思うんですね。そういう意味では、聞き書きをやっていただけてよかったと思います。聞いて書くだけなんですけど、2時間インタビューしてテープ起こしをしますと、原稿用紙で120枚になるんです。一字一句すべて

を起こしていきますので、2時間聞いたらテープ起こしだけで少なくとも20時間くらいの手間暇がかかる。その後、原稿にするまでにたくさんの時間がかかるんです。聞くためには疑問がわかなければいけない。答えてくれたことに驚く。驚きが次の疑問を生む。こうしたことを繰り返しながら、最後の原稿はお話して下さった方の一人称で書かれるんです。聞き手の質問した中身は答えの中に入っているんで、質問は消してもできるんですよって教えてあるんです。2人が同じ土俵に立つことができ会話が成り立っているから、そういうことができる。できあがった原稿は一人称になりますので、聞いてまとめた方は話してくださった方と今度は同じ位置に立って、読んでくださる方へ向かうようになっている。それが聞き書きのやり方なんです。相手の方がしゃべってくださる中身は、わかるというんじゃなくて、一緒になれるかどうかということが間に挟まっている。そういうやり方で聞き書きをやっていただいています。次お願いします。

橋本：慶應義塾大学4年文学部の橋本拓真と申します。私は宮城県南三陸町の志津川という地区に行って聞き書きをしました。その地区がどうみえたか、外見の話になってしまうんですけども、何もなかったです。というのも、広大な荒野であるとか砂漠であるとか、そういう所はみなさん想像しやすいと思うんですけど、実際にその地に立ってみると、写真であるとか、壊れた炊飯器とか、



家の土台はそのまま残っていたりもするので。ニュースで外面だけは見えるんですけど、実際に生活感があつたものがなくなった広大な大地にポツンと立ってみると、とても恐ろしいことがあつたんだなっていう実感がそこで初めて出てきました。聞き書きに行こうと思ったのも、実際に自分で出向いて、その地を見てみようと思ったのがきっかけだったので、それはすごい衝撃的な出来事でした。聞き書きをしてどう思ったかということですけど、私は、被災者の体験を聞くというのは、つらいことを思い出させてしまうので、とても失礼なことではないのかなと勝手に思っていたんですね。とても話しにくいことなので、こちらがたくさん質問をして引き出してあげないといけないと勝手に思い込んで行ったんですけど、意に反して、現地の方々は、話したくてしょうがなかったという印象でした。私が若いからということもあるのかもしれないんですけど。あまり途中で質問することもなく、うなずいてお話を一緒に合わせて聞く。疑問点があればまた聞くという形で、特に引き出すというわけではなく話してくれたので、実際にやってみて、聞き書きの印象が変わったというのもありますし、現地の方がこういうふうに思っていたんだなと、やってみてはじめてわかったということが、とても大きかったです。

塩野：橋本君が聞いた二人の方は、どんな職業のどんな方だったですか？

橋本：一人は阿部章さんという方で、現在手芸センターという所で働かれていて、お土産の「オクトパス」タコを作られているということで。とても素朴な作業ですけど、仕事があるだけで全然楽しいし、時間をもてあましてると余計なことを考えてしまうので、とにかく仕事をしていることが幸せだと阿部さんはおっしゃっていました。

塩野：その方は何歳の方でしたか？

橋本：正確な年齢は覚えていないんですけど、60代前後、50代後半の方でした。

塩野：被災される前はどんな仕事だったんですか？

橋本：被災される前は無職。その時は働かれていなかったということで。体が少し悪かったので静養していて、おうちで休んでいる間に被災されたと。

塩野：この方は現在の状況をどう受け止めていらしたんですか。

橋本：とにかくご家族の方は、阿部さんの場合は無事だったそうです。地区によって様々ですけど、家族の中に被災された方がいる方と、被災して亡くなられた方がいない家族とでは、だいぶ温度差はあるみたいです。自分はそれまで無職だったし、家族もいて、被災後も家族もずっと元気でいて、仕事も与えられてとても幸せ者だということはおっしゃっていました。

塩野：阿部さんの聞き書きのタイトルが、「家族があって、仕事があって、生活している人は幸せだ」ですね。これは、彼自身のことを言っているんですか。それとも、彼が他の人のことを見ているんですか。

橋本：半分三人称的におっしゃっていたんですけど、自分を投影してもいる表現だと思います。

塩野：それは、幸せなわけがない。もちろん、少しは幸せを感じることはできるけど、家も流されているだろうし。命だけは助かった、それから、お土産のオクトパスか何かの作業に携わっている。生きて、そういう作業をして、ここにいる自分に満足しなきゃいけないんだっていうふうに、思い聞かせながら話してくれたからこのタイトルになっているんですか？

橋本：周りの方を見て、思い聞かせて、自分でおっしゃっている感じはありました。

塩野：他の人に比べれば、まだ自分はいい方だという言い方に近いんですか？

橋本：はい。そういう印象は受けました。

塩野：もう一人の方は？

橋本：もう一人は、渡辺重一さんという方で、以前、生コンクリートを製造されていて、南三陸町に通ずる道のインフラを作るゼネコンで働かれていたと。生コンクリートのことなら、誰にも負けないと豪語されるほどの方でした。

塩野：この方も、家だとか、全てなくなっているんですか。

橋本：はい。

塩野：家族は？

橋本：家族は、無事でした。

塩野：この方は今、何をなさっているんですか？

橋本：地区の行政区長だった方で、復興に関する対策側といいますか。インフラであるとかの知識には事欠かないので、まだその時は正式には決まっていなかったみたいなんですけど、これから関わってやっていきたいということをずっとおっしゃっていました。

塩野：その小さな幸せを頼りにしていく人たちと、率先して自分から復興のために立ちあがってできることをしようという方々と、やっぱり違う感じにいるもんですか。

橋本：そうですね。特に、僕の場合は、お話をお聞きしたお二人が、性格も考えも対照的だったというのもあって、とてもわかりやすかったですね。自分の現状をとにかく幸せと見て、これから頑張っていこうと決心されている方と、もう本当にこれから二度とこういうことが起こ

らないように、とにかく地域の声として自分が声をあげていかなくちゃいけないと言われている方と、人間性もあるのかもしれないですけど、対極だったような気がします。

塩野：今度の101人の中には、この事態に自分ができることをまず一生懸命やろうという人たちがだいぶいるんですよね。今の方にしてみても、自分の経歴を話しながら。彼は、生コン会社の責任者だった。

橋本：そうですね。工場長をされていたと。

塩野：その作り方にしても、生コンの処理にしても、自分の仕事に自信のある方だよね。被災の後も、自分ができることは何でもやって復活させるんだって、リーダーになれる方ですよ。あなたはお話を聞いて、自分はそうなんだろうと思って聞いた。あなたは、「わかった」というふうにおっしゃった。他人の人生なんてなかなかわかりづらいだろうと思うんだけど。それから、初めてみた瓦礫の中の日常用品を見て、それ以前の生活と、それから今の生活と、それが理解できる根本にあるのは想像力だと思うんだよね。被災者に会って、あのテレビの残酷なシーンをたくさん見てきた。この中で震災が起きる前の生活を具体的に想像することができるだろうか。あの怖い一瞬を、みんなの話を聞いたり、跡地の瓦礫を見て、あのすさまじさを想像できるだろうか。それを共有できるだろうか。被災後の皆さんに会って、様々な話を聞いて、わかるような気がすると思いながら質問を繰り返し、会話をしていると思うんだけど。実際には、僕は今お二人の話を聞いてみても、なかなか共有感を持つことができない。どうやったら手伝ってあげられるだろうかとか、何ができるだろうかという考え方からもう一つか二つ上がって、「共に」という部分をどう感じられるかということが、とっても大事だろうと思うんですね。例えば、今みなさんの住んでいる自治体があつた瓦礫を引き受けることにほとんどが反対であつて、処理できないでいる。岩手県、宮城県の場合でいえば、放射能を浴びていないのがほとんどだと思うんですが、たった数パーセントしか処理されていない。復興はとにかく、ごみと土砂をどう処理するかから始まるわけなんです。でも、その一番最初の突端にさえも着けてないのは、国が悪いとか、行政が悪いとか、そういう問題の以前に、被災というものを共有できてないんじゃないかとさえ思えるんです。

僕はこの101の聞き書きを少しでもお手伝いしようと思ったのは、とにかく具体的な人、たった一人でもいいから、一人の人に会ってお話を聞いてくる。その人の背景と歴史と生活に少しでも触れることができたならば、物事を想像するための一個のきっかけをつかめるだろう。未来を模索するためには、様々な方法があります。箇条書きにしていけばいくらかでも出すことができる。理想もあるかもしれない、現実もあるかもしれない。様々に自分の判断を加えながら未来を想像することはできると思う。だけど、一個だけその人に過去があつたとする。その過去の点と現在の点を結べば線になります。その線の延長上に新しい未来を築こうと思えば、過去を振り返らざるを得ない。それから、過去の一点でも二点でも点の数が増えれば増えるほど、未来の数は、たぶん限ら



れていく。だけど、過去の部分を互いに共有し合うために、何かをしなければ前に進む新しい考え方というのはなかなか生まれてこない。そういうこともあって、この 101 の聞き書きを皆さんに体験していただいた。体験した中から何が生まれてくるかは、教科書に書いてあるような聞き書きの効用のことをいうわけじゃない。ただ、一人ひとりが被災者の方の前に自分の体を置いて、面と向かって話をする。話の中身は残酷であるかもしれない、楽しかった思い出であるかもしれない。でも、とにかくそれをまとめることを前提に聞くことで、互いに共有していく部分ができる。対立して話を聞いていた二人が重なり合って、今度は皆さんが他の人にわかってもらうための努力をして、この作品集が出来上がっている。一冊の形にして、みなさんに読んでいただけるようにしたんです。今日は本ができたということと、それから聞いた人たちの声、聞かれた人たちの声を皆さんの耳で聞いていただきたと思った。そして、少しでもこの本を読む上で、想像力をふくらますきっかけになってもらえば、次のステップの何かに役立つかもしれない。そういう思いで今日の進行をさせていただきました。僕の役目はこれで終わります。ありがとうございました。

【質疑応答】

質問①：NPO に関係しており、仲間で聞き書きの活動をしている一人です。これは財団の方に聞いた方がいいのかもしれませんが、主題があってサブタイトルがあって非常に読みやすくなっていると思います。聞き手の方は、はじめての東北や初めての聞き書きだったと思いますけど、本をまとめるにあたって、塩野さんをはじめ、いろいろアドバイザーがいて成立したんでしょうか。

富永：塩野さんには、聞き手のご指導を一番始めにいただきました。聞いた後のテープ起こし、編集は聞き手がやります。その後、まとめたものを話し手にお送りして、これでよろしいでしょうかとチェックをしていただきます。中には 2 回、3 回やりとりがあった上で完成したものもありました。まとめるのに問題がある場合には、東京財団や共存の森の事務局の方からいろいろアドバイスはしましたが、基本的に聞き手がまとめて、話し手が確認して、作品が出来上がったということです。

質問②：日立製作所に勤務しております。聞き手になられた 3 人の方にお伺いしたいです。お話を聞く時に、現地の方は方言とか使われたりすると思うんですね。そこで言葉の意味がわからないとか、先ほど一つ獅子舞かなんかの例で、聞き手の人が思い浮かべることと、話し手の方が話しているものが実は食い違っていたりとかして会話が成立しない、泥沼に入り込むだとか、そのようなことはなかったんでしょうか。もしあったら、どうやって切り抜けて、認識合わせをしていったのかということをお伺いしたいと思います。



吉原：漁師の倉本さんに話を伺った時は、やはり漁師の方の使う単語、漁師の方には当たり前

のことで、私は全く知らないということばかりでしたので、一つ一つ確認しました。延縄のロープに一つ一つ針を付けていく作業についても、まったく初めて聞くことばかりでしたので、ずいぶんと時間がかかりました。それから、太田シズさんに伺った時も、お赤飯があらではいろんな具が入っていたりして、私が普段お赤飯と思っているものとはちょっと違うものでした。そういうことは時間をかけて聞くようにしました。特に倉本さんの方は、土地の言葉が強かったです。文章にするのもだいぶ時間がかかりました。でも、それが暖かさと言いますか。私の記憶にお二人の話がいつまでも残っているのは、やはり土地の言葉で聞いたからだなと今は思っています。

佐々木：私が聞き書きをしたお二人は、64歳と42歳の男性の方だったんですけど、ほとんど方言を使われていなかったの、全然わからないということはないです。ただ、聞き書きをする上で、ちょっとでもわかんなかったら立ち止まって、それは何ですかって聞いて、わからないことを残さないようにと、その辺は注意していました。「田東剣舞がね・・・」と言われた時に、それって何ですかって聞いて、それは伝統舞踊ですっていうふうに。他の学生の子は、本当に方言だらけのおばあちゃんを聞き書きしたんですけど、その子は全然わかんなくて、泣きそうになりながら聞いていて。それが、そのおばあちゃんは泣きながら聞いてくれたということで、本当にその子のことが大好きになって。そういうことが生まれるのは、おもしろいなと思いました。

橋本：僕が聞いたお二人も方言が強い方だったんですけども、親切にその場で解説していただきました。話し手の方がお話に熱中されるとその解説もなくなってしまうのですが、それ何ですかって聞くのもお話を止めてしまうことになるので、しばらくお話が流れてから意味を確認しました。見当外れなことをいっても、違う違うって笑われるだけで、仲良くもなれたので。試行錯誤だったんですけど、とにかく話し手の方のお話の流れを意識して聞いていました。方言はその後で埋めていったといった形です。

質問③：講演業をしております。今日は素晴らしいお話、ありがとうございました。せっかく遠いところから芳賀様、平野様、お越しく下さいましたので、この離れた東京に住んでいる者でも何かできることがもしありましたら、一言でも二言でもお教えいただけたらと思います。

芳賀：どうもありがとうございます。物質的なものとか金銭的な援助、これはもちろん大切に誰もいないということはないです。でも、この1年8カ月、感じているんですが、傾聴ボランティアというのが大切だなと。一方的に話させるというのを、被災地でもいろんな自治体の保健師さんがやってくれました。今回の「聞き書き 101」、私が地元の窓口になったんですが、何をするのか、その後どうなるのか、昨年は一切見えませんでした。私も手探りでしたが、この101によって、吉里吉里地区の52名、ほとんどの方がとても喜んでます。自分が物を言えたという、その喜びにね、みなさん溢れているんですよ。その後何がどうなるということとは関係ないんです。吉里吉里という所は、南三陸町よりも方言がきついです。ボランティアの学生さんが我々の言葉にちょっと関心を持ちまして、今、その吉里吉里語の辞典が電子化されています。近々、本にもなるそうなんです。そういうつながりができたことを、地域の人たち

は生き生きと語っているんですよ。私はそれ見ててね、今回、101 でいいお付き合いできたなと感じます。私もそうだったんですが、娘とか孫みたいな方に話すわけですよ。とても楽しいんですよ。震災の悲惨なこともあるし、若いころのいい思い出もある、恋愛話もある、それから将来に対する希望と不安もあるっていいながらね。ほとんどの方はこの 101 で語ったことをとても喜んでいるんです。これだけでも価値はあったなと感じます。ですから、こういうふうにお話を聞いて頂けるだけでもいいんじゃないかなと。復興に対する考えも十人十色です。ですから、みなさんがこういうふう話を聞いてくれて、よく理解してくれれば、私はまあ、それも一つの復興の後押しかなと思います。

富永：聞き書きという形でなくても、もっと吉里吉里の方のお話を聞きたいという方がいらっしやったら、吉里吉里としてはウェルカム、お受けしたいと。

芳賀：そうですね。大歓迎です。吉里吉里ファンになってください。

平野：当初ですね、話したかったんです、誰かに向かって。そのくらい、話っていうのをしていませんでした。私は町内会長もしてまして、数えたら名刺の裏全部肩書になるくらい役をします。それに自分の仕事もしてて。その頃、避難所に食料は来ましたが、在宅の方は食料がなかった。たまたま私の息子が大槌町役場の食糧のチーフをしていました。私は最後まで食料を在宅の人に配っていました。役場の方では食料物資を 7 月くらいで止めたんですが、私は密かにストックしておりまして。9 月いっぱいまで、私の町内には配りました。そういうふうなことでやってきました。だから、7 月に皆さんが来てね、本当に話したかったんですよ。聞き方も上手なんですね。生い立ちから始まりましてですね。私、とにかくいろんなこと言いたかったんで。でも、本当につらかったことは全然聞いてくれなかったんですね。本当はそれを言いたかったんです。こういうことしたとか、お袋を探したとか。私の家は 100 メーターほど流されました。2 階建ての家だったんですが、1 階は潰れちゃって、2 階だけ流された形で。食料配布の後とかに、少しの時間を見つければお袋探しました。絶対お袋は家の中にいるちゅうことで。で、10 日目になってやっとお袋見つけました。自分の家の下から。すごい涙が出てきちゃったんです、やっと見つけたって。そういうことも本当は言いたかったんですけど、話を聞いてくれる人は、お聞きしたいのはこういうことっていうふうなことですね。もう何時間でもしゃべりたかったんです。地元の人同士では実際できなかったんですね。だから、すごく嬉しかったですよ。

富永：明治学院大学は大槌町と協定を結んでいろんな形で支援しています。学生もボランティアで入っています。芳賀さんのお話にありました吉里吉里語辞典の話は、その明治学院の浅川先生が支援しているプロジェクトです。ウェブに上げるだけではなくて、冊子にして残そうと。その印刷は釜石の印刷所でやろうということですが、200 部、300 部くらいオーダーがないと印刷にかけられないそうです。よそものとしてできることとしてですね、吉里吉里語辞典を地元に残すために、その本を買うということもできるのかなと思います。

芳賀：今、学校名をおっしゃったんですけども、吉里吉里のお祭りにも、その学生たちが交代で 10 人くらいは常にいました。大神楽とか、虎舞とか、あと男性陣はお神輿を担いだり。そのくらい地域に密着して、たまにはうるさいなと思うくらい。夕飯どころか夜中までいる子もい

ますけども、それほどいいつながりが出来ています。

質問④： バイオグラフィ・ワークという人生を振り返るようなことをお手伝いする仕事をしております。吉里吉里のお二方にお聞きしたいんですけども、聞かれたことに対して、何か気づきがありましたか。他の人に向かって自分の幼い時からのことを順序だてて話すということは、多分これまでにあまりなかったのではないかなと思います。あえてそこを質問されて答えていく中で、今まで自分が思ってきたことと違うことを思い出したりとか、あるいは何か次につながるような気づきなんてことがあったのかなと思ひまして。

平野： 地元の人たちとは育ってきた環境は同じですから、地元の人にその話をしたって、これは全然。だから、よその人が来て頂いたおかげで、自分の生い立ちをお話できだっというの、よかったなと思います。

芳賀： 吉里吉里の仲の良さが出たと思います。それは人間性だけでなく、地域性、地形的な部分もあったんです。大槌町全体の中で、吉里吉里は峠をひとつ越えて隔離されている。町内で吉里吉里だけは小学校と中学校が一つなんですね。ですから、生まれるとすぐ全員同窓生なんです。いろいろマスコミで住民が結集したって出ましたけども、反面、閉鎖的な所があるんですね。町の中心地とか、隣の町の人とはあまり話さない。ライバル心がどっかにあるんですね、無意識に。ところが、県外の方とか、外国の方が来れば、もう相手の口を止めても言いたくなるという、そういう人の心理ってありますよね。それだったと思います。

塩野： 聞き書きの基本的な形として、例えば親が子に話せばいいではないかということがあるんですが、親子ってなかなか話づらい。おじいさんは、孫には上手に話せるんです。その延長として、他人に聞かれて、相手に説明しなきゃいけないという行為が間に挟まることは、その人にとっても初めてなんだけども、自分の人生を整理するある役目をたぶん果たしてくれてるんじゃないかと、僕らは聞いていて思っています。

質問⑤： 東京大学1年、HCAP 東京大学運営委員会の広報をしております。今回のテーマは、個の物語から社会を考えるということで、人々の生活という観点からすごく貴重なお話をいただけてありがたかったです。大学にいと、復興に関して、震災をきっかけに新しい街づくりをしようとか、新しい産業を興そうとか、そういう話をよく聞くようになったのですが、それって、今回聞き書きで皆さんがお話したような生活に戻すっていう観点からいと、少し外れてしまうのかなって感じました。生活を取り戻したいと考える人たちがいるなかで、そういった新しい街づくりっていうものが、みなさんにどうやって映るのかということをお聞きしたいと思います。

平野： 大槌町の復興に、東京大学の助教授さんが来ています。その人たちは、机上でですね、机上で、机上で住宅地図に線を引いてるんですよ。そういう状態です。地元の意見を何回かとったりしているんですが、結局は住宅地図に線を引いただけで復興しようってしています。けども、我々の地区は、一世帯 50 坪ずつの区画なんです、それに線引きをしようっていう。50 坪だと、こういう都会であれば 3 階、5 階のビルディング建ちますけども、うちの方では、もう何も建たない。犬小屋しか建たたねえんだというのが、うちの地区なんです。だから、そ

それを 70 坪とか、80 坪に増やして下さいってお願いしても、それは全然入ってないんです。それで、減歩っていうんですが、例えば 50 坪あった人が約 1 割減らせば、5 坪減ることになりますよね。5 坪ずつ減らして行って、道路を広くするんだと。それで 4 メーターの道路を作るんだと。今 50 坪で駐車場がないのに、5 坪減らして 45 坪にして、道路を 4 メーターにしましたと。駐車場ないんだから、道路の両脇の人が車置いたら道路何メーターになります？小学生だってわかりますよ。そういうことを今、実際に復興だってやってるんですよ、学者が。これは防災上からいってもね、問題でしょ。4 メーターの道路を作りました、避難路確保しました。え？って。机上の論理じゃなくて、地元の人ともう少し話をしてほしいですね。

芳賀：地域の声を少しずつは聞いてはいますけどね、聞いてはいますよ。ベースになる図面を出して、住民の声を聞いて。確かに、平野君がいう通り、ほとんど原案の通りです。高台移転の予定地が実は水が沸く所だとか、土砂災害が怖いとかで、やむを得なく変わった所がいくらかはあります。ただ、概ね地域の声を聞いているとは言えないという人が多いですね。彼らもつらいのは分かるんですが、ただ、図面引くにも地元の首長とか行政とか県庁じゃなく、上から来た方々が図面引いているということがスタートにあります。これ、悪いとは言いませんけども、なかなか地元の声をわかってもらえないなど。うちの吉里吉里地区では、高い堤防いらなくて言っている方多いんですよ。逃げる教育が大事だと。堤防に高い予算組むよりも、そっちの方がよっぽどいいと。出向で来たある方が、こういう言葉使ったんです。「私たちはみなさんの気持ちは十分わかります。しかし、私たちはみなさんの生命と財産を守るためにこういう図面を引いています。」その時、反発したんです。そう言うとなんかの住民は口を開けられないよと。失礼ですけども、みなさんは基本が国民とか町民の生命と財産守るために働くんですよ。ご自分からそれを言ってもらっちゃ困りますよ、と。気の弱い方ですと意見述べられなくなります。平野君なんかは発言する方ですし、私もどちらかといえば発言する方ですけども。ほとんどがね、下向いている方が多いんですよ。ですから、立派な町が 10 数年後にできた後に、何人の人がそこに残るのかなという不安はありますね。

質問⑥：大阪の関西大学の商学部で今勉強しております。芳賀さんが、「あせらず、くじけず、あきらめず」という標語があるとおっしゃったんですけど、いろんな人がいると思うんです。ちょっと落ち込みやすい人とか。そういう人たちの気持ちをまとめるために、イベントなど含め、どんなことをなさっているのかなということをお聞きしたいと思います。

芳賀：今回は、あまりにもエリアが広いということから、なかなかスムーズにいかないと思うんですよ。自分の町だけ見て焦っちゃダメだよということは、言っていますね。ただ、4 年か 5 年のうちにはね、家を建てたいという方多いですから、そのくらいの所はがんばりましょうねと。それから、建てる場合も補助金とかどのくらいあるのっていう心配も受けますけど、それはこの頃になればこのくらい出るよと。下水道、上水道引くにもこのくらい出るよと、だから、がんばりましょうね、がんばろうな、という明るい話題もしながら。実際私もね、去年思ったんですけど、あきらめなくなるんですよ。別に金銭的にとか人間的に何かあったわけじゃないですよ。私、震災からまだ一度も涙を流していませんけど、時々ね、一人になった時に肩の力

が抜ける時あるんですよ。

質問⑦：壇上にいる橋本君の指導教授です。一緒に志津川で聞き書きをさせていただいて、お話をさせていただいた方が思ったよりみんな元気だなという印象を受けました。しかし、ふと、こういう場に来れない人がいるんじゃないかと。つまり、自分のことを語れない人たちもたくさんいて、来れた方っていうのは、いろんな意味で元気な方で、そういう方の声しか僕たちは聞いていないんじゃないかなという気持ちがちょっとしました。裏を根ほり葉ほり聞きたいわけではないんですけども、何か語りえなかったことというのがあったんじゃないかというのが気がかりです。そういうことで思うことがあったら、一言お伺いしたいなと思いました。

芳賀：現実その通りです。今日も本音で言う方々、ここに連れて来たかったんです。でも、俺は人がたくさんいるところでは言えないよとか、東京までちょっと行くのがなとか、話すこと自体が苦手だと。でも、この101人の話、よくぞ言ってくれたなと思うことを言ってる人もいますよね。一対一で、こういうたくさんの方の前じゃなく、避難所で座りながら向き合ってた話だから、本音で言っている部分たくさんあるんですよね。もっともっと声はあるかと思っていますけども、いろんなタイプの声が聞けたと思っています。ただ去年は、大槌町は町長選挙があって、それから議会の選挙があった。その関係者は時期が時期だったんで省きました。そういう意味では、年が違ってれば、もっといろんな声も聞けたかと思っていますけども、概ね吉里吉里の声は出ているなと思っています。

以上
(文責：富永)